



# 若者と宗教

——カルトの現場より——

高橋紳吾  
*takabashi shingo*

青年シッダールタがそうだつたように、若者はいつの時代も「真理」を求める。もしも「私」の生きている意味がわかれれば、もしも私が「何者」であるのかわかれれば、生きる指針が与えられ、努力する目標が見え、人生が輝やいたものになるだろうと。真理を宗教と置き換えるも失当ではない。問い合わせは存在の意味へと向かっているのだから、哲学でも倫理でもなく、宗教である。

もつとも若者は宗教を求めてカルトに近づくわけではない。いや、むしろ日本の若者は、宗教にある種の偽善、いかがわしさ、悪を感じている。おそらく戦後日本の在り方のせいだと思う。それもあって、だから、カルト側は「これは宗教ではありません」といつて若者に接近するのが常だ。こういうふざけた誘い方は、日本でしか見られない特殊な勧誘テクニックである。情けないことに、最初から既存の宗教は、誘う者、誘われる者の両者か

ら忌避されている。たしかにカルトはわれわれの目から見ればまつとうな宗教ではないが、では、まつとうな宗教とは何かという問い合わせる即座に投げ返されるだろう。だがあえてこれには答えない。答えれば、相手の思うつぼ。

「ほら見ろ、だからあいつはわれわれにカルトのレッテルを貼るんだ」と言わわれかねない。教義論争は専門家に任せることにして、ここではカルトの現場に居る者として、現代の若者が求める「宗教的なもの」を描写してみることにしたい。

### ●カルト問題は宗教問題ではないけれど

地下鉄サリン事件のとき、オウム真理教は宗教ではないという発言がしばしば聞かれた。しかし違う。あれは宗教以外のなものでもなかつた。しかし、サリン事件の問題は宗教問題なのかという問いを立てるとき、話は微妙に違つてくる。いやむしろカルト問題は宗教問題ではないとはつきり言つた方がいいだろう。ところで、カルト問題というときの「問題」とは何を指しているのか。

息子が奇妙な宗教に凝り始めた。なんとか辞めさせたい。そういう相談が舞い込んでくることがある。家の中は宗教問答で大騒ぎになつて、これまで仲の良かつた父と息子の関係は最悪である。怒った息子は家を飛び出してしまつた。しかしこれだけではカルト問題ではない。信教の自由が保証されている限り、

息子が何を信じようと、どういう宗教行動を取りようと自由であるべきだ。

しかし団体生活を始め、多額の献金をするのみならず、その団体が作成した壺や聖書を不適に高額に売りさばき、昼夜を問わず熱心に新たな信者を勧誘し、さらに教祖が一方的に決めた、言葉も通じない結婚相手との集団結婚式に参加するとなれば、問題があるといわざるを得ない。一体どこが問題なんだと、一部の、自称・リベラルな宗教学者は言うけれど、じつくりとその心理プロセスを検討すると、その献金は熟慮されてのことではないし、二束三文の壺を売る手口は、「信じなければ地獄に落ちる」式の恐怖を煽つての詐欺行為だし、信者勧誘はインフォームドコンセント（統一教会だと知らされた上での同意）のない無茶苦茶なものだし、集團結婚には「両性の合意」など全く見受けられないものだからだ。

靈魂の復活を信じてミイラ事件を起こした団体、末期癌と「足裏診断」して、信じれば治るからと億単位の寄付をさせた団体。集團自殺、暴行、傷害、教祖によるレイプ、殺人などなど。何を信じても良いのだが、現世で「取り決め」を無視する行動に信者を驅り立てるこことを総称して私たちはカルト問題と呼ぶ。

しかし事情は単純ではなくて、「そもそも

宗教とは反世俗的（反社会的）なものです」という主張がなさることがある。これは一九九九年二月の日本弁護士連合会（「日弁連」）の「反社会的な宗教活動にかかる消費者被害等の救済の指針」という意見書が出された際、とある仏教会の理事が反対声明として述べた言葉である。おそらくカルト被害にあつた人々の相談など受けた経験のない「高僧」なのだろうが、現場感覚が希薄で、まるで他人事である。これには別の背景があつて、まつとうな宗教活動も規制を受けるのではない

かという不安があるらしい。特に経済的な面で。これはまつたくの杞憂だが、情けない話である。

カルト問題のほとんどは民事・刑事問題であつて宗教問題ではないけれど、カルトも宗教であるかぎり、それは聖職者の喉元に突きつけられた大問題のはずである。そういう意味で『歎異抄』は特別な輝きをもつてゐる。当時もカルト的な動きが確かにあつたのだ。さて、話を現代の若者にむけよう。

### ●生のリアリティの欠如

離人症という精神医学の用語がある。「自分だという実感がない」「自分が考えたり行動しているという感じがしない」という内界意識での離人症。「世界と自分との間にベルがかかる」とか「景色や花をみても美しいと感じない」という外界意識で

の離人症などがある。こういう症状はうつ病や、精神分裂病、神經症などで出現するほかに、著しい疲労時やジエットラグ（時差）などの過酷な状況でも見られるとしてきた。ところが、健康と見なされている現代の若者の中に、慢性的な離人症状を持ち合わせている人たちが少なからず存在していることがわかつてきた。心の病でもなく、特別に過酷な状況下にあるわけでもないのに、である。おそらく、日々の都市生活の单调で人工的な刺激に慣れきつてしまつて、これが一種の感覚遮断のような効果をもたらし、鈍感になつてしまつたままである。旅に出てその单调さから抜け出ると、一時的に症状は改善するが、帰れば元の黙阿弥。

それとは逆に、日常的に目に触れるもの、耳に届くものが、いきいきと輝いてくる場合のあることも知られている。癌告知された患者さんたちである。全員ではないけれど、おまかなかパターンとしては、当初は絶望し、死神と取り引きし、怒り、震えるが、やがて死を受け入れる。そうすると不思議なことが起きてくる。これまでにも感じなかつた雨の音、子どもの声、犬の鳴き声、うるさいと感じていた車の音までも、限りなく愛しく感じ始める。空気の層、夕暮れの光、雑草や枯れ木までもがこれまでとは全く違つた様相を呈してくる。これは癌の症状でも薬の副作用

でもない。限られたいのちという意識がそういう感覚を呼び起こすのである。死刑囚にも同じような心理が認められることがある。死ぬ直前になつてそれがわかる。もつたいない話である。すんでのところでそれがわかつたとしても、今までの人生は無明。救いがないではないか。まして死期を知ることができる特別な人たちだけが、この感覚を共有しているなんて。大体の人間は、痴呆になつてしまつて迷惑をかけて死ぬのである。

奇妙なことだが、健康で、豊かであるといふことは有り難いことには違ひないが、いのちへの構えいかんによつては、一般に幸福と思われていることが不幸の種でもある。それは死を身近に感じられないという「不幸のようないなもの」なのだ。いのちへの構えとは、生きる理由のことである。そして何度も言うが、生きる理由は宗教が扱うべき問題である。カルトはその生きる理由を若者に「明確に」与えてくれる。

地下鉄サリン以後、なぜ高学歴の、理系の、眞面目な青年たちがカルトに入信したのか、さまざまな仮説があげられた。またカルトに入る若者に一定の傾向があるのか、どういう家族が多いのかという問い合わせられた。高学歴、理系、眞面目という属性は、なんのことはない。教祖がそれを望んだからにすぎない。文系ならカルトに引っかかるといふのは、他者を意識する（輪郭づける）自己が

のは嘘である。高学歴の理系エリートは、なまじな文系よりもほど文学や古典、さらに宗教にも通じている。また、カルトに入る若者が私たちのこれまでの調査結果である。

戦後すぐから高度経済成長期までの新宗教の入信動機については、「病・貧・争」からの現実的な解放という現世的な理由が一般的であった。それはカルトに入る若者たちの親世代たちが中心的役割を担つていた。それに対して新新宗教というカテゴリーに入るカルトへの入信動機は、現世的というよりも現世忌避的であつて、誤解を畏れずにいえば、中世的な仏教大衆運動に通じるものがある。けがれたこの世を離れ、浄土を願うという心理背景である。とはいっても肝心の現世は、かつてのように戦争や飢餓に覆われ死が差し迫つてゐるわけではない。事情は全く逆で、死は先進国社会では遠くなりすぎた。人類はこんな時代をこれまで経験したことがない。しかし遠ざかつた死ゆえに、生のリアリティが相対的に欠如し、それが離人症にも似た、精神の死を引き起こしてしまつ。いのちから陰影とか輪郭とかいったコントラストが消えかけている。コントラストの消失は「生と死」だけでなく、自己と他者の間でも起こつてゐる。先進国の少年たちに理由なき殺人が多い

希薄なゆえだ。だから酒鬼薔薇は自分を「透明な存在」と呼んだ。そういうところでは他者にもリアリティを感じない。

### ●理想社会という買

暴走族の少年たちは決してカルトなどに入らない。自分が「悪」だと知つていて、他者に正義を求めず、理想社会などありえないことを知つている。やがて彼らは自ら暴走族を卒業し、たくましい社会人になる。それに比べてカルトに惹きつけられる若者たちは、基本的に善人である。真面目である。有能と評価されている。でも物足りない。

私が東京拘置所で面接した地下鉄サリン実行犯のT被告は、自分の意志が弱いことが気に入らなくて、麻原の修法に惹かれた。周囲から見れば、偏差値の高い大学・大学院を卒業し、スポーツ万能。義侠心に富み、心優しい好男子なのに、もつとがんばらなくてはいけないと自分を責める。こういう人格特性はカルトのメンバーになるのに最適である。Tは小学校一年の時に親に買ってもらった百科事典の平均余命表に愕然とした経験を持つている。いつか人は死ぬ。充分に燃焼して人生を終えたい。こういう思いがいつもしていた。だから、努力が足りないのではないかという自分を責める気持ちが離れなかつた。そして教祖は確かに、修行が足りないと厳しく指摘

し続けた。そんなことを言つてくれる人物はこれまで存在しなかつたのである。祖父は禅に励む人だったので、Tのがんばりすぎに注意を与えていたのだが、老人の言葉は若者に届かなかつた。「善」であろうと努力することは非難されるべき筋合いでない。でもそれだけでは「救い」はないはずだ。理想社会はこれまで一度も実現したことが無く、これからもあり得ないように、完全な善人などは肉体を持つかぎりにおいて存在しえない。それを教えるのが宗教のはずだ。

「真我」という、おそらくアートマンの翻訳と考えられるオウム用語がある。なんのことはない。大昔の過去から、死後に輪廻する来世にいたるまで、自分の「魂」が続いている、それが本当の自分だという厭尊以前の思想である。これが原始仏教を自称するオウムの「生きる意味」の本質である。Tは逮捕されたあと、死刑になることは別にどうでもよかつたし、覚悟はしていたが、教祖のマハームドラーを明かして無間地獄に墮ちる恐怖に怯え、黙秘を続けた。マハーモドラーとは、理不尽な行為を教祖が命じても、それは修行として特別な意味があるので、疑念を持つのは罪であるというオウム用語である。よくできた詐欺なのだが、「宗教とは反世俗的」なのであるという強弁に似てなくもない。反世俗というのではなく、脱世俗というのなら語彙

的には納得できるのだが、ただし世俗から乖離した宗教はやがて無用の長物になる。厭尊が医王と呼ばれたのは、世俗と密にかかわったからである。もちろん、死んだ人を生き返らせることができるなどという魔術的のかわり方ではない。努力すれば理想社会が出現し、みんなが幸せに暮らせるなどというユートピア思想を植えつける類の政治的かかわり方でもない。安易な癒しなどは虚偽であり、生も死もなく、自己も他者もなく、老いも死も、善も惡もない。それは空である。仏教なら真我ではなく、無我である。その一方、空とは縁起であつて、働きのことだ。ニルバーナは約束されている。今を生かしている。だからすごい。その覚醒への要請が第一義だが、努力を否定するものではない。しかし真我を想定して理想社会を作ろうとするのは勸善懲惡的な幻想である。最初から間違っているのだ。

先進国社会では、いのちが痩せてしまつた。いまほど宗教が求められる時代はない。しかし若者が宗教に求めるのは観念ではなく、具体性である。課題は山ほどある。例えば、少子高齢化。自殺の急増。精神障害者の社会復帰。いのちあるものは平等であるという教えを現代の宗教はどう導くのか。カルトの現場からは出番を期待されている。

(たかはし しんご・東邦大学助教授、日本脱カルト研究会代表)